
鬼の系譜

ウィットテノス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼の系譜

【Nコード】

N9264M

【作者名】

ウィツテノス

【あらすじ】

毒によって余命を言い渡された主人公が、家を出て山林を彷徨うというお話です。以前書いてたやつの手直し版です。

鬼の系譜

15歳 冬

夜、目が覚めた。

長い間、眠っていたらしい。

いつ眠り、いまどんな状況か分からない奇妙な感覚。

不思議なほど気持ちが冷めて、体中も冷え切っている。

周囲は暗穩としてるというのに、この目が、眼光が、眼に映る景色を照らすように鮮明に周囲の光景を映し出していた。

物音も匂いも、何か感覚が違っている。

耳に入る音は反響し、その意味を解することは出来るけれどもそれに対する反応が湧かない。

どんな音も、鈴虫の鳴き声も、風の戸を叩く音も、全てが無感動に受け入れられた。

ふと、戸の外の中庭に、誰かが立っていると予測した。

察知のような、錯覚のような、妙な確信を伴って布団から起き出して、戸を開け放つ。

すると祖父と父と見知らぬ男が、中庭の池の隅で、話し合っていた。はつきり聞き取れるような距離ではないと思うが、反響して増幅する耳のお陰ですんなりと意味を解することが出来た。

「ダチュラは変毒種です。よしんば、生き永らえたとしても痺れと心毒によって悲惨な負い目を受けるでしょう。それによって一ヶ月と持たずに亡くなられてしまいます。」

ご期待なされていた御子息が、このような憂き目に遭うのはさぞ心痛む事でありましょうが、息のある内に、見取ってあげるのもやむを得ない事かと存じます」

祖父が重い吐息と共に言葉を吐き出した。

「私とてそれは分かっている。だがしかし、身内が肩を持たねば誰があの子を守ってやれるのかね？」

あの子が禁治産者となろうが、近隣から疎まれようが……生きている間は、見守ってあげたい」

見知らぬ男が口を開いた。

「しかし、子は他にもおるでしょう。身内から歪子が出れば御八家としての貴方方のお立場が危ぶまれます」

その言葉に反応して、グツグツと何かが煮えたぎる。自分にはついで、感じたことの無い感情だった。

目の奥がチカチカとして、頭の奥が引つ掻き回されるような不快さを感じる。

イライラと、気持ちが荒れてくる。これがダチュラに噛まれた心毒かと、この時悟った。

胸の深奥に酸が溜まったように、苦しい。

普通の反応ならショックを受ける程度の言葉に、殺意を覚えるほど、ダチュラの心毒とは言葉に過敏になるようだった。

その、殺意と不快さと、そして大きな苦痛に耐えながら、何とか自分を保って三人に近づいた。

「父上、御祖父様……」

「気がついたか……具合はどうだ？ 弥助」

と、父がなんでもない風を装って私に聞いてきた。

「事の次第は理解しております。私は、家を出ようと思います。ダチュラに噛まれて、意識を失いかけている時に、次に目覚めた時この場所にはいられないという覚悟を、既にしておりました」

「弥助」と言う祖父に「もう、自分の内で決めていたことです」と返した。

二人は押し黙る。最後に自分の尊厳だけは守っていたかった。

祖父は大きな溜息をついていた。

やがて父が苦渋に満ちた表情で、頷いて言う。

「分かった、認めよう。この家にある物は何でも持っていきなさい。家宝でも、何でも」父は言葉に詰まってむせび泣いた。

それを無感情に、私は見ていた。

情動が失われつつある。これも心毒の一つか。早くこの家を去らなければ、と思った。

「でしたら、懐刀を一ついただきとうございます」

そう言う父は頷いて「分かった、私のを持っていきなさい。この

家の家紋が彫つてある。

どんな事になつても、どう成り果てても、お前はこの家の子だということを忘れないよう、持っていてきなさい」

父が懷から懷刀を取り出す。

「ありがとうございます……では、失礼します……」

そうして、身支度を整え、家を去つた。

父は居たたまれない、という面持ちで私を見送り、祖父は部屋に籠つたまま出てこなかった。
それが家族との別れだった。

一カ月後

雨が降っていた。

擦り切れた衣服を庇いながら、山林の中を走る。

どこか息を潜めるための、雨風をしのぐための屋根が必要だった。

雨の中、泥に足を取られ、一刻ほど早い速度で走っているのに、息切れ一つしていない。

ダチュラによる毒は、体に何か変革を与えているようだった。

ケケケケケケ、と笑い声がして、足をピタリと止めた。

しかし何者もない。これは、幻聴だろうと既に気づいていた。

幻聴が始まる。森のあちこちから声が聞こえてくる。

ケケケケケ。あそこにいる。誰だあいつは？ 汚い奴だ。はははは。

という声が、木々の合間から、草葉の陰から、聞こえてくる。

それも甲高い神経に障る声で、落ちていていた目の奥の違和感が再び現れ、チカチカと頭がざわめいて何ともいえない不快な気分になるのだった。

「うるさいっ！」そう叫ぶと、何だあいつ。黙れ。うるさい。はははは。という声が聞こえてきた。

怒りが増幅して、神経が休まらない。

胸の深奥の酸が、なお一層に煮え立ち、頭がざわざわとざわめく。このまま狂ってしまうんじゃないかと思った。

ガサガサガサ。

葉と葉がこすれあう音。すぐにパツと見ると、実際に葉が揺れている。これは幻聴じゃない。

瞬間的に背筋に凄まじい悪寒が走って横にばつと飛び退いた。

するとすぐ前の瞬間まで立っていた場所に巨大な白い残像が駆け抜け、ザザザ、と泥濘に足を取られながら止まった。

それは巨大なイタチのような生き物で、背丈は私より高く、八尺はありそうな巨躯の凶獣だった。

まるで何か巨大な憎悪の塊を向けられたような凄まじい剣幕で、魔獣はこちらを睨んでいる。

睨んでいる。睨んでいる。それをこちらにも、あらん限りの憎悪で睨み返した。

「殺されたいのか？」そういった後瞬間的に、まるで発作を起したように魔獣に向かって駆け出した。

強烈に吐き出される殺意に対する悪意が、私の胸に涌いた。

泥の中を直線的に進む私に合わせるように、魔獣は一步進んで迎え撃つように腕を振り下ろす。

雨が目に入らないよう、目を細めながら私は無感情に魔獣へと進んでいく。

鼓動が揺らぐ。

駆け寄る足の力が大きく膨張し、人間離れたような勢いで瞬発的に魔獣の懐に入ると、首筋の、骨に当たらない程度の深さで懐刀で魔獣の皮膚を撫でた。

シュツ、シーーーーーー、と魔獣の首筋から血液が溢れ出るのを確認する前に、音でそれを知った。

魔獣は振り下ろそうとした腕を宙に掲げたまま、脱兎の如く森林の中に駆け込んでいった。

周囲が安全になると、膝が折れるように自然と地面に落ちた。驚いて倒れこむ前に地べたに手を着く。

地面は、魔獣の血で濡れていた。

体が言う事を聞かない。そういう感覚は感じなかったけれども、体は思った以上に緊張して、力が抜けたらしい。

顔が熱い、火照ったというには生易しいぐらい、熱かった。

血に濡れるのも構わずに額に手を当てると、通常の体温より遥かに高熱である事が分かった。

殺した。殺されれば良かったのに。と幻聴が耳元で囁いた。

胸の奥の酸が、心の防壁を溶かしていくのが分かる。

そして人格が侵食された時、自分は人間としての自我を失う事になるのだらうと、そう思った。

目の奥が白む。精神的な疲労と絶望とが、意識を急速に奪っていった。

五ヵ月後

ひゅー、ひゅー。洞窟の奥で、自分の呼吸の音だけが聞こえる。

情動が失われ、心毒は精神から熱情を奪っていった。

人でないモノに、既になりかけていた。

世界が自分を阻害している感覚が、舞い落ちる木の葉の音さえも恐ろしいもののように感じて、洞窟の奥から出ることが出来なかった。森の中で殺した魔獣も、動物も、幽霊の如く幻聴となって現れ、その頻度と悪意はもはや苦痛の極致に達していた。

胸の奥の著しい苦痛。引き裂かれるような感覚が、常に蝕む。水溜りに映る自分の眼には、既に生気がなかった。

このまま死ぬしかないのだろうか。
抑えていた願望が沸き立つ。耐え切れずに、絶望の呻き声をあげた。

その時、その時に、確かに現れた。脳裏に、永遠に続くような、深い深い淵が。

その深遠の面に、私は存在していた。

暗い淵が、感情の境界を越え、突き破った時、何か人には遥か及ばない感情の深層が表出したのだった。

絶望さえも、入り口に過ぎないと察知せざるをえないほど、深く深く、感情の淵は続いている。

不思議と、気持ちが和らぐ。

私はここに来た事がある。この絶望の果ての深遠に、私はいたことがある。

次第に気持ちが静まって「ははははははは！」と私は闇の中で大笑いをしていた。

何ともいえない全能感。絶望の反動に享樂が生じたように、ただただおかしくて笑った。

だって、おかしい。あれほど苦しんだ、胸の深奥の酸が、もつと強烈にココロを溶かす闇によって、私のココロのナニカと引き換えに溶かしていく。

幻聴は、断末魔を上げながら、暗闇に溶かされていく。

そして私さえも。

私はこのまま、闇に溶け出して、開放されたいような気持ちになった。

その時「弥助」と誰かが闇の中から呼んだ。

弥助。
弥助。
弥助。

女の声だ。

その呼びかけに対する自然な反応として振り返ると、闇が消えて辺りは静寂に包まれた、元の洞窟に戻っていた。

「あ、ああ……」また変わらぬ現実が、そこにあった。

振り返らなければ、闇に溶け出して開放されたのに。という思いと、いやあれは幻想だ、という失望が交差していた。

そう思うのも束の間、自分の内の変化に気づいた。

胸の奥の辛酸が、無い。

理屈の無い不安や恐れも、あの闇に吸い取られたまま、戻ってこなかった。

しばらく呆然と、自分の体を見下ろした。

そしてこの治癒された、という感覚が勘違いではないことを知ると、自然と地面に倒れこんだ。

それから、回復後に下山して家に戻ると、すぐに医院に連れて行かれ、医者は峠を越えたのだ、と曖昧な説明をしていた。

15歳。この時の出来事は生涯忘れる事のできない体験となった。

佐一豪と呼ばれるこの国は、峰州と呼ばれるこの地方の北端に位置し、この地域に何十とある国の一つに過ぎなかった。

人の数は凡そ五万人の小国。古代に伝わった稲作の技術により、定

住した佐一という一族の祖が開いた国である。

今日は、国を挙げての祭りがあつた。

豪の中枢に位置する集会場に、人が押しかけ、それを覗こうと何百人もの人が集まっていた。

私はそれを警護する守衛の役柄についていたから、朝から起きだして集会場の中で、鬼の舞い手を護っていた。

ポン、ポン、ポン……ポン、ポポン。

幕座に座した六名の男が、和太鼓を肩に担いで定期的な感覚を取って音を舞台と観衆の間とに響かせる。

舞台に立つ主役は一人。

鬼の面を被った舞い手が、異様に丈の長い和服を靡かせて、刀身の短い脇差のような刀を宙に振る。

和太鼓と刀が空を切る風切音だけが鳴り響く奇妙な舞台に、やがて鬼の舞い手の歌が乗る。

低くしゃがれ、長く伸ばされた歌の一節は耳を震わすように音量の大小を感じる。

どこか、威風堂々としていて、何か、心を掴むような荘厳な儀式。

観賞する人々は祭りの最後の目玉であるこの舞いに見入っていた。

やがて舞が止まり、和太鼓を担いでいた男達が太鼓を降ろすと、そこで祭儀は終了となり、鬼の舞い手はその場に座し、一礼すると観客から拍手がわき上がった。

かーんかーんかーんかーんかーん。

祭儀を行う館の外、村の外周を囲む石造りの外壁。
その周囲に聳える木造の塔から、鐘の音が鳴り響いてきた。

これは、村の有事に鳴らされる鐘の音だと聞いていた。
朝、訓示を受けていた事が本当になった。

「――祭りの間は、特に警護が必要である。なぜならそれこそ敵にとっての好機であるから。」

金沢様の、嫌な予告が当たったようで、守衛一同も途端に緊張した面持ちで周囲を伺っていた。

村人は動揺して、何か狂乱したように「何事だ一体！」と口々に叫んでいた。

「落ち着いてください皆さん！」と、鬼の面を取った、若い端整な顔立ちの若者が叫ぶと、辺りは静まり返った。

この方はこの村の首座（族長）の一族である。

「この時のために、守衛の方々がおられます。守衛の方々、何事であるかを確認し、それに対処してください」

「守衛一同、外に集まれ！」上役の金沢様が、チツと舌打ちをして私等守衛に呼ばれる。

普段から重い瞼で何かにすねたような顔立ちの金沢様が、なお一層顔を強く強張らせていた。

外に出ると、私等を囲むように人々を取り囲んで、こちらを不安そ

うな面持ちで見ている。

それを無視して、守衛達は一様に緊張した面持ちで、金沢様の指示を仰ぐとそちらのほうを見ていた。

「首座一族はなんとしても護らねばいかん。東令順天軍が祭儀により出払っているいま、残る歪軍と協力して事に当たる。

とは言え、我らの仕事は単純である。この集会場におられる首座一族と市民を護る事だ。警戒に当たれ！」

私等もこういう日のために訓練を重ねてきたわけで、各々やることは分かっていた。

私は五番小班に属していたから、班長に従って周囲の哨戒に当たった。

そこから、記憶が途切れた。

ざー、と雨が降っていた。

重い甲冑が泥濘に沈んで、体をなお一層に重くする。

甲冑を体に繋ぐ紐を引き剥がすと、既に体から外れかかっていた鎧は音を立てて泥濘に沈んだ。

口の中は泥を含み、血の味が舌に広がるのを、ベツ、と唾と共に吐き出して、頭上を仰いで雨を口に浸らせた。

斬り合いの最中に、気を失ったようだ。

ともすると吐きそうになるのを、気を保って堪える。

周囲は、村人の屍がまばらに倒れていた。

敵の一派が、襲ってきたのだ。

この地区に警戒に当たっていたのは、小班の我々五名だけで、とても護りきれるものではなかった。

守衛達の屍が横たわるのを、無感動に見た。

何か考えると、無様に気を失って生き永らえた自分を責める声が聞

こえてきそうだった。

とにかく、自分はまだ生きていて、やるべき事があった。

歩き出すと、右腕に左腕には無い重さを感じた。

手のひらに、無理やりに紐で何重にも刀が巻きつけられており、その刀も鐔元から奇妙なほどに刀では有りえないほど剃り返って、折れてないのが不思議なほどだった。

剛鉄によって作られた刀だというこの代物は、そう簡単に折れるものではないだろうから、まだ使えるだろうと目算した。

どの道、他に武器など無い。それに早く、行かねばならなかった。

意外に余力を体は残しているらしく、早足で村の中央の集会場へと向かう。

「お侍様」ふと、途中の民家から村の女が出てきて、こちらをじっと見据えていた。

生き残りらしい。女子供は我々が食い止めた間に村の集会場に避難しているはずだから、この女は何か事情があつてここに留まったのだろう。

見ると、家の扉の奥には血まみれの男性がいて、こちらをずっと凝視していた。

「お侍様、どちらに向かわれます？」一瞬、ゾツと背筋に冷たいものが走った。

貴方は、逃げますか？ そう、悲嘆を通り越した絶望のうねりが、彼女の目に宿っていたように思えた。

斬り合いで恐れたことなど殆ど無い。死ねばそれまでというもの。

しかし、この女の目には、そういった恐怖とは別の恐ろしい何かが宿っていた。

それは狂気かもしれなかった。

「いや、私は、集会場に向かう。最後まで、戦う」そう言うと、私はその女から逃げるように前へ歩き出した。

なぜ血まみれの男が家の中にいるのか、なぜ私を呼び止めたのか、そんなことは、知りたくも無かった。

集会場を遠目で見ると、閉ざされた門の前で、残った守衛達が、襲撃者達と斬り結んでいる最中だった。

特徴的な赤い鎧を着込んだ敵兵の数は味方の数を圧倒しており、押しつぶされるのは時間の問題と思われた。

そのような状況であるのに、不思議と気持が焦らない。昨日まで共に寝食を過ごしてきた仲間が死んでいくのを見て、にも拘らず情動が動かなかった。

その奇妙な感覚が、私に戦場を見渡せる余裕を与えた。

豪の中枢にまで敵兵が侵入するとは、歪軍は壊滅したか。

その考えすらも、冷静に事実として受け止めていた。

――その時、ふと目にやった集会場の後方、集会場を見渡せる丘陵に、敵の親玉と思しき人物を見た。

明らかに派手な鎧を着込み、一人だけ馬に乗った人物。私は軽く嘲笑った。

あの場所は、偶々集会場を見渡せるわけではない。

その丘陵が有利な位置になるように、計算されて集会場が設置されているのだ。

つまり、敵の本陣が構えやすくするために。

「そんな見え見えの罠にかかっちゃ、ダメでしょう」私は集会場に行く道に戻って、遠回りで背後から丘陵を登っていった。

とはいえ、こちらは一人。絶望的な状況には違いない。幾ら敵の主力が集会場に向いてるからといって、敵の大將に護衛がついてないわけは無い。

しかし、こちらとしては一矢報いればそれで良いという心境で、勝てる算段も成功の見込みも最初から度外視していた。

丘を登りきると、私は何の打算も無く堂々と敵の正面に立った。登りきったところの正面に、たまたま敵がいたというのが正しい。

それは、傍目には無謀な馬鹿か勇ましい勇士のように見えたことだろう。

敵は、数十人はいた。

「斬れ斬れ！」私を見ると発作的に敵が叫び、私は正眼に構えると間髪いれず駆け寄ってきた若い男の袈裟懸けを左手の剛鉄製の手甲で弾いた。

その行動は予想外だったらしく、絶望的に態勢を崩した男の胸の片腹を、極度に膨張した右腕の力で、刀をふるって撫でるように渾身で払った。

剛鉄の刀と鉄の鎧では強度に雲泥の差があるらしく、敵の甲冑を切り裂いて、男の片腹を抜き払った。

反り返った刀でも、扱いは心得ていたから、むしろ私はむかし反りの強い刀を好んで使っていたから、問題なく斬る感覚が分かった。

けれども、問題は刀の強度だった。

いくら剛鉄製の刀とは言え、こんな力任せに鎧と人間とを斬るように扱ってはいつかは折れる。現在の刀の曲がった状況がどういう経緯を辿ったか、何となく察しがついた。

男は自分の体の内部で止まった刀を見て凍りつく。刀は渾身で振るったけれども片手の力だけじゃ抜き払う事は到底出来ず、相手の胴体の中央で止まった。

それを相手の体を蹴り押しつつ刀を強引に抜いた。相手は衝撃そのままに後ろに飛ばされた。

これほどの深手ならば、もう復帰は出来まい。

仮に与えた傷が致命傷じゃなくても良い。深い傷で心が動揺して動けなくなるほどになりさえすれば。

武人であっても、自分の傷を見れば心が萎える。深い傷を押して動き回る者は、私の経験上稀だった。

胴を払った男から目を離れた瞬間、自分の頭上に向かって誰かが刀を振りかぶってくるのが残像で見えた。

この「振り下ろす」より早い行動は？

私はそれが自然に突進であると答えを出すと、相手に半ば飛び込むように突進した。

相手は背が小ぶりで、私の肩が顔に当たる様にぶつけられると、刀を振り落とそうとしていた勢いが殺され、衝撃が互いの体にかかりながら、相手は地面に吹き飛んだ。

私は勢いを足で殺しきれず、手を突くと、不用意に近寄ってきていた別の男の足を払った。

具足をつけた足の半分の深さまで刀身を払うと、私はその男に見向きもせずに馬上の大將首に向かって進んだ。

三名と斬り結び、二名は重症、一名軽症（復帰の可能性あり）で、残る敵は十余名。

遠巻きに左右から私に刀を向けている。これは、好機だった。直線

状に、敵の大將と私の間には誰もいない布陣となった。

心臓が暴れだし、力を持て余すように膨張した足の筋肉を撓らせて突如走り出した私は、周囲数名にとって予想外の行動であるらしく、相手等が詰める前に私は親玉に到達すると確信した。致命傷じゃなくて良い。むしろその方が都合が良い。

そう頭の中で計算して、情けなく一声も発せず硬直している敵の親玉の胸を敢えて選ばずに、片足を斬りつけた。

足が飛ぶ光景も感触も確かめられなかったが、相手方の引きつった声で大方成功したと分かった。

そして振りぬいたままに振り返り、再び構える。大將の右足が、泥濘に落ちて血を吹いていた。

大將の前に二名が立ちふさがり、これ以上の追撃を許さない様子。

こちらも、それ以上の追撃をする気はなかった。

片足を切断された大將は馬上から転げ落ち、悲鳴を漏らしながら地に転がっているところに一人が駆け寄っていた。

雨が一層強くなった。

視界がより悪くなるが、そんなものは関係なかった。

後は、傷に怯えて敵が引いてくれるかどうかで、これ以上やることはなかった。

というか、これ以上は無理だった。

さつと後ろを向くと全速で走り出す。

追う気配がしたが、後ろから更に「追うな！」という怒声が響いた。

次に目指したのは集会場である。

途中から息が切れて、田園のあたりで呼吸を整えた。

心臓の鼓動が力尽きたように弱弱しくなり、力が脱力していく。

ぜえぜえ、と、呼気と鼓動の乱れで命に関わりそうな危険を感じつ

つ、また歩き出す。

集会場では、まだ斬り合いが行われていたが、先ほどのような活声はなかった。敵も、味方も、だいぶ疲労しているようだ。

さきほど圧倒されていた人数差は幾分か盛り返してはいたが、それでも味方の数が減っている。

潰されるのは時間の問題だった。

「敵の大將を討ち取ったぞ！」そう叫ぶと、すぐさま向こうから怒声がした。

「惑わされるなあ！ 良くある手だあ！ あいつを斬れえい！」

五名ほどの敵の集団が来る。これを使い切るのは、出来るかどうか不安だった。

「弥助！！」味方だろうか、誰かが私の名を叫んだ。

しかしそちらに意識はいかず、ただ目の敵を凝視した。

ちきしょう、せっかく大将の本体に切り込んだのに、撤退しないのかよ。そう齒軋りしながら、すぐに目の敵に向かって刀を構えた。

先頭の一人が駆け込んで斬りつけてくる。芸の無い、袈裟懸けだが、剣の振りは早く、手甲で防ぐのに精一杯だった。

こいつは、相当に強かった。

弾かれても崩された体制そのままにこちらのドテッパラに蹴りこんで相手は倒れた。

それをかわせばこちらの勝ちだったが、普通手甲で弾かれ、態勢を崩されたらそんな要領良く動けないはずだから、こちらとしても予想外だったので、かわせなかった。

相手の足は鳩尾にもろに入っていたが、極度の緊張から痛みは感じなかった。

それより周囲に敵が回りこもうとするのを、さっさと後ろに飛び退いて外し、左側から回り込もうとしていた男にこちらから斬りかけた。

さつと後ろに飛んで、次の一飛びで相手の首を飛ばそうと横薙ぎに斬り払った。

しかし刀は宙を斬るだけで、逆にそれをかわした男の目の覚めるような一刀が頭上に迫った。

辛くも手甲でそれを弾くと、後ろから更に突きがくるような空想が頭の中に生じ、反射的に体をよじると、その通りに刀が私の体の脇を通った。

まったく意識してない事ではあったが、後ろから突きを繰り出した男の顔に、回転しながら左手の手甲を打ちはなった。

まるで自動的に体が動いたかのような感覚だった。

剛鉄製の鉄の塊で顔を打たれたのだから、ひとたまりもあるまい。そう思いながら後ろに飛び退くと、五名の敵と若干距離をとった。

「早く殺して戻って来い！」そう向こう側から叫びのたまう声がする。

それを、「結構な手練です！」と五人の男の、最も背が高いやつが言い放った。

ポーーーーー、ポーーーーー、と集会場の方から法螺貝を鳴らしたような音が鳴ると、集会場にいた敵の集団が引いていくのが分かった。

「本陣が撤退した！ 戻れ！」と向こう側から声がかかってきた。

すると間髪いれずに男達はこちらに背を向けて走り出した。追う気も気力もなかったし、追えるほど有利な立場でもなかったの
で、私も周囲を確認しつつ、味方の方に駆け寄った。

「弥助！ 無事だったか！」

「増援に来るのが遅いぞ、一体何があった！」

仲間の守衛達と一部歪軍が混ざった味方たちが、私を取り囲むのを無視して、金沢様のところに向かった。

「弥助か」と金沢様は呟く。その顔は疲労し、汗が滴っていた。

「五番小班班長に代わりまして、状況を報告いたします。

我々は南西村部を巡回しておりましたが、敵の本陣の一派と出くわし、交戦の後私を除く五番小班は討ち死に。

私は疲労を回復させた後集会場へと向かう道すがら、敵の本陣が本某丘陵にいるのを確認いたしました。

そこで一矢報いようと敵の本陣を奇襲し、敵の大將を負傷させる事に成功しました。

その後、集会場へと向かい、今に至る次第でございます」

おお、と、周囲の味方から歓声が上がる。

金沢様も眉根を開いて、確認するように聞いてきた。

「敵の大將を、負傷させた？ お前一人で？」

「はい」

「敵が撤退したのはそういう訳か……取りあえず、信じておこう。よくやった、素晴らしい働きだ。」

日が落ちれば東令順天軍が戻ってくる！　それまで警戒を怠るな！
各班の再編成を行う、全員隊列を組め！」

その後、日没と共に東令軍が戻ってきて、ようやく豪の警戒が緩められたと、警備に当たっていた私にも感じる事ができた。

その間敵軍が襲ってくる事はなかったが、それから何日もの間情報収集のため周辺国に草が活発に送られ、私の友人も草として隣国に送られた。

その友人の話では、今回豪を襲ったのはこの地域では有名な雇われ武士団で、国や集落の依頼で戦争を仕掛ける傭兵のような者達だったとの事。

問題はその依頼主の特定であるが、それは難航し、それから一月が経過していた。

首座一族を護る守衛隊は、武家の嫡子が習練所と呼ばれる学習館に六年間通い、卒業すると入隊できる。

ただし、卒業するのが難関であり、卒業できない場合は留年となる。習練所に在籍できる最大年数は八年であるから、卒業できる者の数はごく限られていた。

その習練所に通うには更に子供の頃に三年間門学院に通って卒業せねばならず、それも難関と呼ばれている。

だから、守衛隊に入るのは下流中流武家の嫡子が最も憧れるところであり、そこに自分が入れたのは、同時に一族の期待を背負う事となっていた。

今日は非番であったが、先だつての戦での功績により、班長に昇格していたので、その説明を聞きに駐屯所へと向かっていた。

同僚の駒井は今日は勤務であったので、駒井と一緒に豪の武家町を歩いていた。

「はあ、ここのところ連日外勤が多いから、俺は少し疲れたよ。

お前が俺の班の班長にならなくて良かった。お前が上士だとこういう愚痴も言いつらくなるから」

駒井が気の抜けた声音でそう言う。

こいつにはいつもそういう所があった。どこか、気の抜けたような。

「確かに幸運だよ。俺は班長としての経験は無いし、役柄も向いてるとは思えないからあまり優秀にはなれない。

俺の班にいたら、苦勞するだろうからね」と私は返した。

「でも、それにしても、敵の大將を討ち取ったのに、班長に昇格だけなんてお前は納得いかないんじゃないのか？」

「褒章はちゃんともらったよ。殆ど親にあげちゃったけど。親も喜んでたし、俺は構わないよ」

屯所への道は、武家町を抜け、高屋敷町と呼ばれる高家と呼ばれる高位の武家の屋敷が並ぶ地区にある。

私は分類上中位武家に属するから、守衛になる前は殆ど足を踏み入れなかった地区である。

歩く人々の姿はそういった位の高い家の者を目にするよりむしろ、その手伝いをする奴徒（奴隸）の姿のほうが多く目に付いた。一般の市民は田園を挟んだ向かいに家を建て並べて住んでおり、農業と小工業を営んでいた。

屯所へつくと、駒井と別れて金沢様のいる座敷へと向かった。屯所の中は手伝いとなる奴徒はおらず、守衛達で雑務をこなしていたから、屯所内の情報が外に漏れる事はなかった。

「失礼致します、一前弥助です」

襖を開けると、金沢様はくつろいだ様子で煙管を吸っていた。

「弥助……お前は非番だが、通達があって呼んだ。幕壕からの通達で、お前を内勤時は近士につくようにとの内達だ。

外勤の時は五番小班の班長として活動するのは変わらない。

でだ、連日忙しくてな、近士への就任にあたっての就任式は省略し、

代わりに班長として外勤に行ってほしい」

近士とは首座一族の直近で護衛する役柄である。
それ自体は名誉な事なので異論があるはずは無かった。

「外勤の内容はなんでしょうか？」

「ああ……豪の従属下にある南海地方の村に、歪子が発生したらしい。

ダチュラに魅入られた墮子だ。

そいつが他国と内通して、協力を企ててるという連絡が入った。
先だって争いがあったから、何か関係があるかもしれない調査の
実行を幕壕が判断したようだ。

今日からお前の小班で行って調べて来い。そのためのあらゆる権限
を与える」

歪子……自分と同じようにダチュラに噛まれ、生き延びた奴か……。
極玉に、ダチュラの心毒に耐え切る者がいる。

私のように完全に治りきるといふ症例は皆無で、生き延びてもずつ
とあの心毒に蝕まれ続ける。

そうすると人間としての性質が失われ、心に障害をきたすようになる。

そうした人々は歪子と呼ばれ、道徳的な観念に極めて疎くなり、悪
意的で残忍。非常に強い自己愛を持ち、そのために他者を犠牲に出
来ると言われている。

私の場合、医者から治ったという診断を得たため、歪子という名称
は張られずに済み、医者や家族が隠してくれたお陰で表ざたにはな
らなかった。

だけれど、偶々私に私と同じ境遇の人間の調査が命令されるのがど

うとも気になったが、言い出せなかった。

「歪子は、人間だと思ふな」金沢様が煙を吐き出し、目を細目ながら言う。

「人から野獣に成り下がった者だ。一切の容赦をするな。甘く見るな。常に警戒しろ。」

今回の調査はお前達の班の他に、二班同じ目的で別の命令を与えている。

最終的には、歪子は別の班で殺害する予定だ。黒でも、白でも。

歪子は確率的に重犯罪を犯す場合があり得る。お前もこの仕事に当たっては一切の感情を持つな」金沢様は極真面目に、そう言い放った。

たった一人の相手に、守衛三班編成で調査とは、どういっつもりだろうと思った。

この忙しい時期に明らかに過剰な人材の配分である。

そこまで人を割く価値のある情報を持った相手なのか、それとも歪子が本当にそこまで危険なのか、判断しかねた。

屯所に戻り、五番小班の部下である三好を見つけると、他の部下を呼ぶように命令し、自分自身は一度家に帰ることにした。

屋敷に帰ると、調査であるから軽装の袴に着替え、刀を二本と、脇差を持ち、家を出た。

次に向かったのはまた屯所である。

金沢様から旅費兼活動経費として十五両を配されていたから、それを貰いに観察部へと向かったのである。

それから戻ってくると五番小班の班員全員が集まっており、全員勤

務であつたから準備も出来ているようだった。

五人全員を確認すると、私は言う。

「今回の仕事は南海州の寒遼村に行き、内通者の調査をすることだ。南海州までは大体八日程かかる。金沢様から常々急ぐようにと言われているが、準備があるならばらく待つことは出来る。

だが、今日中に松前街道の旅館に泊まりたいから、なるべく急ぐように」

そう言うと部下五人中三人が用意のため自宅に戻るとの事で、一人が遅れてきて、出発は昼となってしまった。

三

八日の道程は殆ど計画通りにいった。

松前街道から近江山の登山道を渡り、その山下に流れる小川を渡れば、後はまた街道を進めばその途中に寒遼村はあった。

この地域一帯は佐一豪の首座一族が元々領有しており、そこに流民を受け入れて村々を開拓させた地域であるから、首座一族の影響力は大きであつた。

ともすれば首座一族に流民に対してのあらゆる権限を持っているから、ここでの任務に当たっては、首座一族の権利を譲渡された幕営という組織から更に譲渡される形で、我々が権利を保持し、任務に当たる事ができる。

極端に言えば、この権利を使えば村民の誰かを殺してもお咎めなしということだった。生殺与奪に関連する権利はよっぽどの事がなければ譲渡されないが、今回、その許可が下りていた。

寒遼村の民家が見えてきたところで、班員に声をかけた。

「良いか、村では面倒を起すな。揉め事も禁止だ。

何かあれば必ず俺に相談しろ」そう言っていると、班員は納得したのかししていないのか、周囲を伺いながら頷いた。

まずは誰か村の有力者にあつて事の次第を説明し、協力してもらうべきだろうと、近場に偶々いた村の娘に声をかけた。

娘は我々の姿を見て不思議そうに、けれども若干警戒するような顔をしながら、なるべく距離をとって歩いてるところに声をかけたのだった。

「すまない。私は佐一豪守衛隊五番小班の侍だが、この村を束ねる者の家に案内して欲しい」

「わ、私ですか？ 分かりました、すぐに案内いたします。こちらへどうぞ」余所余所しい感じで、先程より明らかに緊張した様子で前を先導して歩いていく。

他の村人もこちらを気にしている様子で、遠慮がちに横目で見ては顔を背けるのだった。

村の田畑に近い僅かに丘になっている場所に、他の民家と大差ない大きさの家の前で娘が止まって指し示した。

「ここが、村長の家です。どうぞお入り下さい」そう言うと、娘は私達から心なしか距離をとった。

私はありがとうと言いながら、戸口から家の中に呼びかけた。

「失礼致す。私は佐一豪首座守衛隊五番小班班長の一前と申す。村長殿にお目通りしたくあるので、ここを開けて欲しい」

そう言うと、一拍後にどたと慌しい足音が聞こえてきた。扉が開かれ、中から出てきて、こちらを見やるとしきりに頭を下げた。

「これは、本国のお侍様、ようこそお出でになりました。申し訳ありません、主人はいま散歩に出かけておりまして、申し訳ありません」と何度も謝る様子に、こちらは困ってしまった。

何も取って食うわけでもないのに、執拗に怯えるのは、やはり我々が幕営から権利を持って来ることを分かっているからだだろうか。

「いや、構わない。中で待たせてもらっても良いかな？」

「は……もちろんでございます。どうぞ中へ」

中に少し入つてみると、暑苦しく、我々六名が居座るには窮屈そう
で、この老婆も気が滅入るだろうから「いや、やはり先に宿を借り
たい。ここに泊まれそうな場所はあるか？」と聞いた。

「はい、はい、しばらくお待ちいただけますか？　すぐに、手配し
て参ります」と言つて、こちらの返答を聞くとすぐに慌しく家を出
て行つてしまった。

村人全体にかなり警戒されているようだ。

どの村人も目を合わせようとしない。班員も一応訓練と規律を叩き
込まれているから、必要以上に尊大に振舞わないのだが、それでも
やはり私等は怖いしかった。

「班長、これからどうしますか？」と、班員の三好が周囲の様子に
嫌そうな顔をしながら聞いてくる。こいつは班内のまとめ役的な存
在だったので、他四人を代弁して聞いてきたのかもしれない。

私は少し考え「まずは村長に話をしておく。当面の住まいと、食事
を用意するようにと。その上で歪子の情報を聞いておく。

お前達は宿で休んでいて良い」と答えた。

すると三好は頷いて「分かりました」とだけ答えた。他の班員も疲
労が濃いようで、若干安堵したように表情の変化が見て取れた。
近頃口数も減っている。ここらで一日休憩にしておくか、とも思っ
た。

街道沿いにある村だから、宿があるかと思ってたけれど、話を聞けばないとの事で、急遽村民に別の家に住んでもらってそこを仮住まいとさせてもらった。

村長は夕暮れ時に村に帰ってきて、その間私は班員を仮宿に住まわせ、私自身は村長の家で待っていた。

そして夕刻の時、村長の家の襖が開くと、温和そうな老人がこちらの様子を見て「お客さんかい？」と老婆に声をかけた。

「お前様、この方は本国のお侍様です。お前様に話があつてきたそうです」

そう言うところ老人はああ、そうだったか、と言いながら慌てた様子でこちらの居間に入ってきて、私の対面に座った。

「お侍様、お待たせしてしまつて真に申し訳ありません。お気に触つてはおりませんか？」

「いや、何も気に触るような事はない。それよりも、本題に入りたい。

私は幕営から内通者の疑いのある歪子を調査するように命令されている。

その要請はこの村からきたものだ。

そこで、その根拠がなんであるかをまず尋ねたい。

つまり、歪子が内通者であるとする根拠だ」

「歪子は、村の南西部に立つ古塔に住んでいます。元々はそこは我々が管理していたのですが、情けない事に占拠されてしまいました。

何度も討伐に向かいましたが、多くの犠牲者を出すばかりで、本国のお侍様に頼るしかないと判断しました」

「相手は一人だろう。なぜ殺せない？」

「は……歪子に協力する者達がいるのです。そのもの等によって、塔に近づく事さえできません」

「協力者？ その者達の所属する勢力が歪子が内通している勢力という事か。ではその勢力とはなんだ」

「はい……話が多少長くなります。ここ南海州にはエフタリという蛮族が各地に点々と居住しております。

彼らはダチュラを信奉ではないにせよ、敬服し、特別視するしきたりを持っているらしいのです。

というのは、彼らは元々この地域に王国を築いていた民族であり、その王国には、王位継承者にダチュラの毒を飲ませ、それに耐え得た場合のみ王位を継承するという伝承があるらしいのです。

ダチュラの毒に耐えうるのは王位継承者だけ、という事を、王国が滅びた後も伝承として残しているようです。

問題はその事ではなく、それを利用してよとする勢力で、その伝承を利用してエフタリを纏め、蛮族を引き入れようとしている勢力がいることです。

つまり、南方の海人が支配する国が、歪子を利用してエフタリを束ね、自国にエフタリを引き入れようとしているのです」

「いまいち、話がよくわからないな。

なぜ南方の国がそれに関わっていると知り、尚且つ相手の国の意図を一村長である貴方が知りえたのだ？」

「我々とエフタリは互いに交易によつて近からず遠からず付き合っています。その交易したエフタリから、歪子をエフタリが王の再来ではないかと噂している事、そしてその理由であるエフタリの伝承について聞きました。

そして、我々が歪子を討伐しようとした時には、エフタリの他に海人の国から辞めるようにと警告があり、実際に多くの妨害にあいました。

海人の国の使者からの話では、歪子が住む塔は、所有者である歪子からの要請で海人の国が保護しており、一切手を出してはならないという次第でした。

しかし、海人は善意で動くような国ではありませんので、何か打算があるのではと考え、その打算は先ほど言ったような事ではないかと思つた次第です」

「つまり貴方の推測が」

「はい、そうです」

これは、困つたことになつたと思つた。

多少は説得力のある推測で、私であってもその推測と遠からぬ事を考える。

この村長の推測を信じたとしても、仮に我々が歪子を始末したとして、海人やエフタリが報復してこない保証は無い。

そうなれば、当然我々だけで対処できない。

加えて、聞いた話ではこれは先だつての戦とあまり関係の無さそうな話だつた。

先の戦の首謀者探しと豪の警備に兵力を割いている豪からすれば、こちらに討伐のための軍を向けてくれるとは思いがたい。

更に言えば歪子が住むという塔を南方の国が保護しているとすれば、まず国家間での話し合いがもたれなければならないはずだ。

そもそも塔の領域は首座一族の領有地であるが、向こうの国が占有して保護を主張している以上、現場の我々が勝手に動いては領分を越えた行動だろう。

それは事実であるから、どちらにせよ、対処できなかった。

「これは我々だけでは対処が出来ない。

本国と連絡を取り合って対応を決めなければな。そういう訳だから、すぐには対応できない」

「本国の、軍を要請するのですか？」

「それも含めて本国と協議する。そう簡単には、いかない問題のようだ」

「お侍様」その時、襖の方から声をかけられた。

見ると若い、色白の美しい娘が襖の前で怯えた様子で立っていた。

「カナ、何をしている。場所を弁えなさい」と老人が嗜めたが、カナと呼ばれた女はそれを無視するかのようにこちらを見ていた。

「お、お侍様に、ミズキちゃんから、つ、伝えたい事が、あるって……」歯がカタカタと鳴っている。その様子は最初に抱いた印象どおりに怯えていた。

「ミズキだと!？」突然大声を出した村長に私は一瞬心臓の鼓動がはねた。

「カナ、何で……!」老人の顔に血管が浮いてるのが分かる。私は取りあえず老人に向かって「ミズキとは?」と聞いた。

「歪子の名前です。この村の、まだ人間だった頃の……」

歪子から私へ伝えたい事。嫌な予感しかなかった。とても良い報せだとは。

しかし聞かないわけにはいかず、その娘に話を促した。

「ミ、ミズキちゃんが言うには、三番小班と、七番小班のお侍様たちを塔に招いたから、必ずお仲間のお侍様たちと来なさいって。美味しい、お料理を、だして待ってるから、遅れたら食べ残ししかないって……」そう、娘は、意味を理解しているのかいないのか、終始怯えた様子で言うのだった。

どういうことだ！ と内心で動揺していた。

私等と別行動の二班が塔にいるということは、どういうことなんだと。

三番小班と七番小班は今回任務に当たる別働隊の班名で、敵は事情を知らないだろうし、その班名を知っている時点で捕まっている可能性が高い。

これが罠で敵が待ち構えているとすればそれは絶望的である。当然乗るわけにはいかないわけで、到底誘いには乗れなかった。

かといって他の班を放っておくのか？ そうも頭のどこかで思う。しかしだからといってうちの班まで危険に晒すわけにはいかないし、本国に報告せずに全滅したら最悪の失態である。

「お侍様、ミズキちゃんところに、行きます？」「カナ！！ 外に行っていないさい！」老人が怒声をあげてカナ、に外を指差す。

乗るか、見捨てるか。酷い、決断の迫られ方だった。

「塔への道を教えていただけますか。私一人で行ってきます」

「お侍様……！ それはいけません。冷静になってください。ミズキはもう人じゃない。捕まった方々が到底生きているとは思えません。」

貴方は、本国へ帰還し、事の次第を伝えるべきです」

「無論そうするとも。だが見捨てるわけにもいかない。

部下に報告させて私が塔に行って捕まった仲間の安否を確認する。

仮に生きていれば、相手の要求の一部は呑んだわけだから心理的に向こうの心証を良くできる。

仮に死んでいれば、私も殺されるだろうが、その場合班の全滅という最悪の事態を脱せる。

もとより、貴方に命令されるいわれは無い。行かせて貰う」

「お侍様……」村長は額に手をやって頂垂れてしまった。彼にとっても何らかの葛藤と事情があるように見えたが、それを詮索する気も手段もなかった。

「ミズキちゃんのところに行くなら、案内します」と、一人場の空気をまったく介さぬ明るく、けれどどこか不安そうな声で、カナが言うのだった。

四

カナに出発の準備をしてもらっている間に、私は部下が泊まる予定だった民家に立ち寄っていた。

民家では班員達がそれぞれ雑談しているようだったり、一人は横になって寝ているような状況だった。

こちらを見ると雑談をしている流れのままに班員の戸田が声をかけてきた。

「班長、班長は門下時代どれほどの成績でした？ こいつ、首席で卒業したとか言ってる割にはいまパツとしないですよね」と言つてへらへらと笑う。笑われてるのは葛西という班員だった。

普段なら話に付き合うのだが、いまそれどころじゃないので「全員集まってよく聞け」と低い声で囁いた。

班員達はこちらの様子に真顔に戻って真剣な様子でこちらに向き直った。

「同時並行で内通者に対して別任務に当たっていた二班が、内通者側に捕まった。

彼らを入質に、我々を招いているようだ。

だが、班員全員で行くという条件は飲まず、私一人で二班の班員の安否を確認してくる。

お前達は至急豪に戻り、今から伝える内容を報告しろ。

一つ、内通者が内通してる勢力は南方の海人国。

二つ、内通者はエフライム人を束ねうる影響力を持っている可能性があるようで、それを海人の国が利用しようとしている可能性のあ

ること。

三つ、三番小班と七番小班は敵方に拉致されている事。
以上三つを通達しろ」

「七番小班だつて！」と、先ほど笑われていた葛西という班員が驚いたような声を上げた。

「七番小班には俺の親友がいるんだ。冗談じゃない！ このまま帰るつもりはないぞ、俺は！ 班長、俺も行きます」

「ダメだ、不必要に犠牲を多くする気は無い。

安否を確認しに行くのは一人でも二人でも変わらない。お前達全員で本国に戻るんだ」

「それなら、報告に戻るのだってそんなに人数要らないでしょう！」と食い下がってくる。

「何を言っている、本国に戻るといってもお前達が安全とは限らないんだ。

道中を襲われる可能性が無いとは言えないからな。

本国への報告は絶対であるから、戻る人数は多いほうが良い。
聞き分ける、これは班長としての命令だ」

葛西はそれを聞くと、手を頭上に払って背を向けて部屋の奥に引っ込んでしまった。

それぐらいのことは、咎める気にはなれなかった。

「三好、お前が五人の班長になって班員を纏めろ。

みんな良いか、三好が私に代わって臨時の班長となるから、必ず従うようにしろ。

また、仮にお前たちが襲われ、全滅した場合を考えて本国への報告書を村長に持たせてあるが、村人も完全に信用してはいけない。それは鉄則であるからお前達も分かっていると思うが、基本的に自分達で絶対に報告をする、という気概を持って欲しい。以上、用意が出来次第出発しろ」

そう言うと、私は班員に背を向けて民家から出ようとした。すると三好が班長、と私を呼んだ。

「お氣をつけて」と、何を言っているのか困っている様子で私に声をかけた。

「ああ、お前達も」正直、私は若干余裕が無くなっていて、班員と長話をする余裕は到底無く、早々と話を終えて民家の外に出た。

時間をかけると、決意が鈍り、恐怖と不安とが襲って、最終的に行かずに済む方法を考え始めてしまうんじゃないかと、そういう恐怖があった。

命を賭けた場面ならいままで幾度もあった。しかしほぼ確実に殺されるという状況は無く、生きるか死ぬかでなく、死ぬために行くというのはまた別の胆力が必要とした。

村の入り口へと歩きながら、こんなところで俺は死ぬのか、という考えが頭によぎって、途端に可笑しくなった。

こんなところだと言えりほど、俺はいつから希望を持つようになったんだと。

森で狂い死ぬより、仲間のために名誉の殉職をしたほうがよっぽどマシな死に方じゃないかと思うと、気持ちの暗幕が晴れる様な気がした。

街道沿いの道端にカナが待っていた。その表情は明るく、けれども陰がある。

いま、私もきつとそういう表情をしてるのだろうと、そう思った。

街道の道中を白い袴を着た私と、粗末な衣類を着込んだ若い女とが歩いていく姿は、道行く人にどういう印象で写っているのだろう。カナは、コロコロと楽しそうに、ずっと独り言のような話し方で私に楽しげに語っていた。

「ミズキちゃん、私の妹なんだ。子供の頃から可愛かったあ。だけど病気になってから一人で暮らしたいって言って、一人暮らしを始めたんだ。

とても悲しかった。ミズキちゃんがいないと、お母さんしか話す人がいないから、寂しかった。

でも、もうすぐ私と一緒に暮らすんだって。でも、お母さんはダメだって言ってるから、私どうしようか迷っちゃって」

ふふふ、あははは、と一人で楽しげに空笑する彼女の様子のおかしさは分かっていたが、私はそんなことは意に介さなかった。

生き延びてやる、と、どこかで思っていた。

死ぬことを前提に行くのでは、気持が沈んでいくのが分かった。

自分に理性と、尊厳とを維持するには、そう考える事で自暴自棄にならないよう、未来を描く事が必要だった。

カナはそんな私の隣で上機嫌そうに小声で鼻歌を歌っていた。

「塔までは、どれほどかかる？」と私は出発してから初めてカナに問いかけた。

カナは涼しげな美しい顔を振り向けて答える。

「二日ぐらい。だから、ミズキちゃんの住む塔にはいつも泊まっていくな」

「そうか、それで途中では宿があるのか？」

「いいえ、ないから、外で寝るの」野宿か。それならそのための準備がいるんだから先に言えよと思ったが言ってもしょうがないことではあるので黙っていた。

夕刻頃から突然、カナは街道を外れ始めた。

聞くと街道を外れた森林の中に塔があるらしく、ここからは夜になるとぼ辺りが見えなくなるから、松明を持って進むという風に説明された。

「夜の森は怖いよ。でも大丈夫。怖くない」そうカナは隣で松明を持ちながら呟く。

薄明かりに照らされた横顔は皺もシミも無く、まるで幼子のようにだった。

本当にこちらをあまり見ないから独り言なのか私に言ってるのか分からないので、何か答えるか答えないか困るのだった。

街道のときは気にならなかったが、森林の中では隣を並行して歩く歩き方では歩きづらかった。

だから、カナに「前を先導して歩いて欲しい。木が邪魔になって歩きづらいから、一列で進もう」と言った。

するとカナは「一人で後ろを歩くのは、怖いよ。だから隣を歩いてあげる」と言った。

さっきのは独り言ではなかったようだった。

歩きながらも私は周囲を警戒して歩いていた。こういった森林には野獣や魔獣と言った類の獣が出るから、それに出くわした場合すぐに対処が出来るように。

周囲からは歩けども歩けども何の気配もしなかったが、警戒を解く事はなかった。

ふと、突然松明の明かりが消えた。隣を振り返ると、カナは消えた松明の方を見つめていた。

「どうした？」と声をかけると「遠くに獣が大勢いるから、気づかれないように消したんだよ。ここで止まってようね」

カナはあわてた風も無く、恐怖心も見せずにそう言う。

まったく気配も音もしない。私は気配や音といったものに極度に過敏であるのに、その私でもまったく察知できないから、言ってる事が本当なのかどうか疑わしかった。

「左に向かって進んでる。何匹かはお腹が空いてるみたい。でも、私は食べられてはあげない。お侍様も、嫌だよね」当然過ぎる質問なので無視した。

確かに、何か遠方に微かに何かいるような気配がするが、それは気のせいと見過ごす程度のものである。

しかしそれはカナの言う方向と合致していたので、確かに何かいるのだらうと納得する。

その気配は徐々に確かなものになっていき、やがてまた薄れ、完全に消えていった。

本当に、何か獣がいたようだ。

カナは私以上に気配に過敏なようだ。

「もう、大丈夫だね」「ああ、気配はもう感じないな。先に進もうか」と私が言くと、カナは何の反応も無く黙って立っていた。

「どうした？」と聞くと「周りが、見えないよ……」と言った。

「松明をつければ良い。さっさと行こう」

「松明に火をつける火がね、無いんだよ。だから、周りが見えないの」まるでものの分らない子供に諭すように私に言うのだけど、私は松明が必要になる事を知らなかったわけで、そんなこと知るかと言いたかった。

私自身は夜目が効くから見ることに問題は無いのだけど、私は道を知らないからカナが見なければ仕方が無い。

「ここで野宿にするか。もう日が沈んで君も疲れтарう」

「ううん、私はまだ歩けるよ」「……でも、周囲が見えないんだろう」「そうだね、じゃあ休むよ」何かずれた人だなと思いつつも、近場の木を背にして腰を降ろした。

すると、そのすぐ隣の木にカナが腰を降ろした。もうちょっと距離を取って座って欲しかったが、言いづらかったのでそれは黙っていた。

カナは座りながら、目を細めてまた上機嫌そうに日中に街道で歌っていた童謡のような鼻歌を歌う。この暗闇で、獣が周囲にいる状況

で、恐怖心を表わさないのは変わってるなと思う。

私も周囲を警戒しつつ仮眠を取る必要があった。

瞼を閉じて、頭の中の思考をかき消す。そうすると気持ちが、急速に静安に沈んでいくのだった。

五（前書き）

最初に投稿した時に、エフタリという名称をエフライムと間違えてしまいました。ややこしい間違い方をしてみませんでした。いかに設定がいい加減かが分かる…。

五

眠っているのか眠っていないのかも分からない薄い眠りの中に、陽光が瞼の上から突然輝き始めた。

目を開けると、目の直線上にすぐ陽光が差ししていて、眩しさに再び目を閉じ、擦って顔を背けてから再び目を開けた。

カナは地べたに完全に横になつて寝息を立てている。すー、すー、という風に肩の上下している様は、完全に安眠しているようだった。

喉の渴きを覚える。

荷物の中から竹筒を取り出して、少量を口に含んだ。

二日分の行程には充分な量の水は用意してもらったけど、何かあったときのために念のため温存しておく事になっていた。

「カナ」と横目で竹筒を持ったまま呼びかけるが、まったく起きる気配がなかった。

昨日はあのまま寝てしまつてお互い食事はしていないが、カナは食べただろうか。私は荷物を確認すると、食料は減っていなかった。

昨日は朝食食べるようにしようと思っていたから、ちょうど良い。

私は先に食事を頂く事にして、握り飯を頬張った。

食べ終わってからカナに呼びかけて起そうとするのだけど、起きる気配がないのには困った。

あまり時間もかけられないし、早く食べてもらって出発したい。そう思つて、肩を揺すって起す事にした。

「カナ、カナ、起きてくれ、そろそろ出発しないと」

すると僅かに瞼が動いて寝息が止まった。

やがて、瞼の痙攣が二、三したあとに目が開いた。

「お侍様……どうかしたの？」眠たげな目で優しげな声で声をかけてくる。

「食事をして出発だ。目を覚まして食事と飲み物を飲め」私はその場から立ち上がった、もうほんのしばらく体を休めようと木を背にして座った。

彼女は起き上がって荷物の中を探ると、そのまま手を止めた。

彼女の不思議な行動にはいちいち突っ込まないようにしていたが、あんまり硬直する時間が長いので声をかけた。

「どうした」すると彼女は「お侍様は、ちゃんと食べたの？」「ああ、食べたよ」食料が減ってるかどうか確認してたらしい。

彼女は一口握り飯を食べると、それをしまい、飲み水を口に含むと立ち上がった。

「じゃあ、また道を案内するね」もつと食べなくて良いのかと聞こうかと迷ったけど、本人がそれで良いと判断してるのだから気にせず、森の中を先導してもらった。

そうして、夜。

ほー、ほー、という、梟なのか何か別の鳥なのか鳴き始めたところから、あたりは急速に暗くなっていった。

この森では太陽の姿を日中であつても見ることが出来ないほど周囲の木々が高いので確認できていないが、もう日が沈んでしまったらしい。

太陽の光でさえ遮るのだから、月明かりは殆ど森の中に入らなかった。

だからここらで、一休みにしようとかナに言うと、ナは頷いて、また野宿にすることにした。

あたりは暗い。

ともすればすぐ隣にいるナナの姿を肉眼で捉える事も出来ないほど、濃い暗闇が立ち込めていた。

「お侍様、もう眠っちゃった?」「起きてるよ」と素っ気無い感じで応えた。周囲はどうせ何も見えないのだから、目を瞑って周囲の気配を探っていた。

「明日のお昼までには塔につくよ。明日また歩くけど、頑張ろうね」妙にこの娘は人を氣遣う。元来がそういう性格なのか、何か意図があるのか、分かりかねた。

「明日か」そう呟くと、自分の気持ちに暗幕がかかりそうになるのが分かった。

しかしそれは、すぐに意識の片隅に追いやる事ができた。突発的に塔に行く時とは違い、いまは気持ちの整理がついていたから。

「俺の同僚は、生きているのか?」と聞いてみた。聞いたところであまり意味はない。ナナがミズキと近い事を考えると、都合の悪い事は言わないだろうから。

しかし不安が私に弱さを与えた。彼女の慈悲が良心に縋って、本当の事を聞き出せないかとどこかで思ったのだろう。カナはまったく迷わずに間をおかず答えた。

「大丈夫だよ、死んだりしない。安心しておやすみ」こちらの不安を見透かすように、子供を安心させるような口ぶりで優しいに答える。

なんだかこちらはその口ぶりと不安を見透かされたような返答に恥ずかしくなって、それ以上何もいえなかった。

しかし明日への緊張で高鳴っていた気持ちは急速に落ち着き始めた。その原因を考えるにつれて、死んだりしないと言われたことが気持ちを落ち着かせているんだと気づいた。

この女は邪気を感じない。おかしなやつだが、信頼するに足ると思うし、歪子の側の人間から安全だと言われるということは気休めにせよ安心できた。

そうしてまた、疲れもあって意識はまどろんでいったのだった。

「お待様、もうすぐ塔が見えるからね。ほら、向こう側、見て見て」まるでどこぞを散歩でもしているかのような気軽さと気安さで、楽しげに声をあげる。

もうここまで来てしまった。やるしかない。意識を急速に冷めさせると、眼光にいつもの張りや冷淡さが戻っていくような気がした。

遠方に塔が確かに、木々の合間から見える。それは石材のような素材で作られた、堅固そうな、塔というより城塞に見えた。

近づくほどにその威容が分かる。

下側が大きく円形に周囲の土地を埋めており、その周囲には所々朽ちた防壁が塔の巨大な足をぐるりと取り囲み、その外周を武装した人間が哨戒している様子が見えた。エフライム人か、海人の国の兵士だろう。

塔のより地面に近い部分は二段の階段つきの土台があつて、その上に塔がそこらの山々に近いほどの高さで立ちすくんでいる。

てつきり佐一豪にある木造の監視塔に毛が生えた程度の代物だろうと思つていた私は、この古塔の圧倒的な、巨人が作ったのではないかと思えそうな立ち姿に圧倒された。

「この、塔は、一体なんなんだ？」と私はカナに問いかけた。

「エフタリの王国があつた時代に、エフタリ人たちが建てたんだよ。元々、この土地も、あの塔も、エフタリ人のものだったんだ。

お侍様の民族がこの土地を所有して、寒遼村の村長が管理に当たつていたけれどもあれだけの巨大な建築物では管理しきれなくて、殆ど放置されていたんだ。

本当は、あの塔はエフタリ人のものだから、エフタリ人がミスキちゃんに住まいにしてあげたんだよ」

私は続く言葉を紡がずに、ただ驚いていた。

こんな塔が本国で名も知れずにいるのも奇怪だったが、エフタリ人がいかなる手段でこの塔を作ったかも不可解だった。

エフタリ人とは交易と遊牧を繰り返す、我々農耕人とは違う人種で、開いた文明など持っていないと思ひ込んでいた。

それが、目の前に我々の文明が逆立ちしても作れないような塔を目の前にして、その認識が大きく変容するのを感じた。

塔の最下部、巨大な土台から塔に続く階段の入り口には、武装した兵により関所が護られており、我々が近づいてくる時からぎろぎろと眼光鋭くこちらを見ていた。

彫の深い顔の造形的特長と、彼らの民族衣装である、服の両腕の部分にだらりと垂れた房がついたクレールという衣服を着ている姿から、エフタリ人だとすぐに分かった。

エフタリは小部族ごとの纏まりで、それぞれ小部族ごとに独自の考えと族長を持って行動すると聞く。

だとすれば、塔の警備に当たるには、一つの小部族では数が少なすぎる。かといってエフタリの全部族というにはいま見てきただけでは少なすぎた。

幾つかの、恐らく歪子がエフタリの王であると判断した小部族だけがここに集結し、歪子を守っているのだろつと考えた。

精悍な顔つきの若いエフタリの兵は、鋭く、高い知性を感じさせる顔つきをこちらがわに向けたまま、何か言葉を囁いた。

するとその言葉に対してカナが、何か言葉を返していた。その言葉は、よくわからない言語だ。恐らくはエフタリ人が持つ言語なのだろう。

もしかしたら、カナという名は、エフタリ系の名前なのかもしれないと思った。

「お客様を大歓迎いたしますだつて。うふふ」とも信じられない。だがいまさら何も言う事はなかった。

そうして、長い長い階段を上って、塔の門に向かって進んでいった。

六

塔の中は、中央が恐らく天頂まで吹き抜けになっており、見上げると遙か上空に天井が見えた。

外観の凄まじい大きさのわりに、内装はいたって単純で、内部の大半が空洞で、緩やかで幅の広い階段が延々と上空の天井まで続いている。

しかし、あまりにも規模の大きい建築物であるから、その単純な構築でも純粹に感嘆するほどの迫力があつた。

「ここは、王国のお城を守る監視塔だつたんだ。

お城があつた場所を囲むように何本もこの塔があつたらしいけどね、いま残つてるのはこの塔だけなんだよ。

殆どが撤去されたけど、この塔だけは森林の中に建てられているから、撤去しなかつたんだって」

監視塔……これだけの建築物が、とも思つたが、いまさら驚きはしなかった。どおりで内装が簡単なはずだ。過度の装飾は一切なく、機能的な構造であるから。

しかし、こんな巨大な塔で一体何を監視するといひのだろう。まあこれだけ巨大な塔を見れば攻め込む国も攻める気を無くすだろうなと思つた。

「ミズキちゃんは二階の応接室にいるんだ。あまりに大きすぎて不便だから、三階より上は使ってないんだって」

そう言いながら、カナは広い階段を上っていく。

階段の途中途中には扉が備え付けられており、それらの個室が塔全体で何千とあるらしいということを聞いた。

しかしこちらはそんな塔の内装の説明を受けてる場合じゃないので、緊張をほぐしていた。

やがて左右の階段が合わさる地点で、階段が終わり、目の前に大きな扉があった。

それをカナはこちらの気持ちの準備も無視して開けると、また大きな空間が眼前に広がった。

部屋の中央には細長く、何十人は座れそうだと思われる台に、何十もの椅子が据え付けられており、その台の向こう側にはそれを見下ろすように一段高い場所に椅子が備え付けられていた。

そしてその椅子に項垂れた黒髪の髪の長い女が座っており、その隣に若い男が立っていた。

まるで玉座に座る女王気取りだな、と、鼻で笑いそうになった。

私が部屋の入り口に立ちすくんでいる間に、カナは歪子の傍まで行って、何事か囁いていた。

私は声をあげる。

「俺の同僚はどうした？ 料理を頂くのを楽しみに来たんだが、一人で食えつてののか？」

虚勢を張る。その言葉は誰からの返答もなく虚しく室内に響いた。正面を堂々と座る歪子はまるで声に目を覚ましたかのようにこちらに顔を向けた。

黒目が優り、白目が白濁したように色彩の薄い目をこちらに向ける。何か、虚ろな、不思議な印象を思わせる風貌をしていた。

「他にも仲間がいるはずだけれど、その人たちはどうしたのかな？」と、私の言葉を無視して逆に質問してきた。

その印象で、下手に喋れば命は無いなと思った。

「怖がって来なかったよ。だが悪く思わないでくれ。こんなほぼ死ぬような誘いに対して部下とは言え無理やり連れては来れまいよ。私が来ているという事で、そちらの条件を飲んだと思ってくれ」

歪子は椅子の手掛けに肘をついて自信の漲った眼光でこちらを舐めるように見た。

「そうね、そちらはこちらの要求の一部は呑んだ。

でもこの要求の意図にはこちら側の二つの願望があったって想像できなかったのかしら？

一つは私を殺すことを出来なくさせるために、あなた達を捕らえること。

二つ目はあなた達全員を拿捕することによって、あなた達の国への報告を遅らせるという意図。

どちらも、貴方の部下が貴方の国に帰ってこの事を報告すれば、達成されない願望よね」

こちらとしては、返す言葉がなかった。どういうわけか、部下達が本国へ報告に帰っていることを知っているらしい。

どちらにせよこちらの命を握っているのは相手方だから、相手の考え方と捉え方で要求を呑まなかったと判断されれば、それは仕方ないと思った。

「でも、それはこちらが自己解決した」歪子は冷笑を浮かべる。その意味合いは、こちらも察する事ができた。

つまり、部下達も拘束された。

「我々を、どうしたい？」と私は聞く。

私を除く三班の班員全てが捕まってしまったらしいが、その私も、殆ど捕らえられてるのと同じ状況だった。

「どうしたいということはないわ。ただ死んでもらいたい……ここまでは、当初の Assumption（想定）だった。

これから、国と一戦交えるというのに、その国の草如きに女王を取られてはまったくのお笑い種だね。

だから草を全員殺害して私自身の身を守ることと次の一波が来るのを遅らせるという風に考えてた。

ところが……私と同類の人間がよもや草として、たんなる手先として私の命を奪いに来たというのはまったくの想定外だった。

歪子を殺せるのは歪子だけ。

この世に、私を止められる可能性がある者があるとすれば、それはダチュラと、同類の歪子だけ。

貴方が私を殺し得る可能性があれば、貴方と対立する気はない。

例えばそれが、どんなにこちら側に有利でも「そう言いながらも、人を圧倒する気を孕んだ眼光をこちらに視線を一切ぶれないで向け続ける。

私も、ダチュラに噛まれたということを、なぜか知っているらしい。いや、それは調べても分かる事じゃないから、恐らく何らかの感覚的手法で分かったのだろう。

相手は話を続けた。

「この一件から、手を引いてくれないかな。無論貴方の国に対して手を引けと言っているのじゃない。そんなことを言っても聞くわけがないからね。

それに争いはこちらの望むところ。止めるつもりはさらさらない。私が恐れるのは貴方なのよ。

望むものはなんでも与える。この一件から、手を引いてほしい」

随分と自信がおりなようだ。

たかがダチュラの毒を耐え抜いただけの人間が、担ぎ上げられた分際で我が国と一戦交えるだと？

このような状況じゃなければ一笑に伏すところだった。

しかし今は人質がいる。条件としては、飲んで問題ない範囲の条件だった。

むしろ予想外の好展開と言えた。

相手は理由が掴めないけれどもこちらを異様に恐れている。

その理由が何であるかを問いただすよりも、相手の恐れているという言葉を信じて、この条件が真である事を信じたかった。

「私個人が、本国に帰還して、この事案に関わらなければ良いという意味合いだな？」と、念のために条件を聞き返す。

「ええ、それだけ飲んでいただければ、何でも」と、彼女は冷笑したまま頷いた。

その話し方は二十台前半と思われるカナより若い年代の人物としては珍しかった。

私だけが関わらなければ良いという理由は不可解だったが、もとよ

りこの条件に賭けるしかなかった。
何かの罫じゃないだろうなと思いつながら、こちらも頷いた。

「その程度の事であれば聞き入れることは可能だ。
その代わり、同僚達を解放して欲しい。
そうすれば、私は自分の意思でこの仕事を放棄する」

「交渉は成立。
お仲間を連れて本国に帰還するといい。
可能であれば、もう二度と会いたくないものだね」そう言って歪子は微笑んだ。

その笑顔は、無邪気さと、陰が同居した、カナに近いような笑顔だった。

地図、食料、水を渡され、そして武器や鎧を返却してもらって、我々三班の班員は森の只中を歩いていった。

この地点まで来ると、班員の緊張した顔つきも幾分か緩み、仲間内で会話を始めていた。
事情は大方話した。

開放された理由については不思議がついていたけど、とにかく命が繋がったという事で、その場で何か言い出す者はいなかった。

「全員、止まってほしい」と、七番小班の班長の小沼さんが後ろから突然声を上げた。

全員が彼のほうを向く。

「これから今後の方針について村主さんと一前さんの三人で話し合

おうと思う。この場で待っていてくれ。
班長二名、こちらについてきて欲しい」

と、私と村主さんと呼んで、今までたどってきた道をずれて班員達を残して歩き始めたので、私と村主さんは顔を見合わせてついていた。

やがて先頭を歩く小沼さんが立ち止まる頃には、班員達からかなりの距離まで離れていた。

最初に、小沼さんが口を開く。

「まずは我々を救出してくれたことに感謝しよう。

だがしかし、貴方が飲んだと言う条件は無視して欲しい。

つまり、貴方が本国に帰りこの件には関わらないとする歪子との約定のことだ。

我々は本国からの命令どおり、引き続き本国からの指示を仰がずに歪子を殺害する。

そのためには三班が協調して仕事にあたる必要があり、五番小班班長である貴方の協力が必要だ」

私はすかさずに反論する。

「いや、敵との約定とは言え、向こうが守った条件をこちらが破るわけにはいかない。

五番小班には私の代わりに代理に三好を班長につける。理解して欲しい」

彼らを助けた手前納得するだろうと考えていたが、小沼さんは尚も食い下がった。

「歪子との約定など守る必要などない。

戦力は一人でも惜しいし、敵が貴方だけを外すという事には何か裏がありそうじゃないか。

何より本国からの命令は歪子の殺害だ。勝手に敵と約定を結んで帰るというのは背信じゃないのか」

私はすぐさま言い返す。

「その点ならご心配なく。私が命令された内容は、歪子がどの勢力と内通しているかの調査であって殺害する事ではない。

その目的は既に達成されているから、本来であれば班を本国に帰還させても良いところを貴方に協力するために三好を代理の班長にして残すと言っているんだ。

これ以上まだ要求する気か？」

小沼さんはそれを聞くと、書状を袴の裏に縫い付けてあつたらしく、それをこちらに掲げた。

「本国からの別命だ。

わたくし、七番小班班長は、幕営の定める危急用件を満たすと判断した場合、暴虐の君に対しての対抗措置を、幕営から預かりし権限を持つて管理することが出来る、と書かれている。

暴虐の君とは歪子を表わす隠語だ。

それに対しての対抗措置とは貴方のことだ。

歪子を最も殺害できる可能性が高いのは同類である歪子だけ。

この命令によって、貴方は私に協力しなければならない」と、小沼さんは冷たさを感じる声音で言い放った。

小沼さんが歪子と同じことを言っている事に驚いていた。

歪子を殺せるのは歪子だけ。どういう意味合いだ。

私自身を管理出来ると言う言葉の表現に、少なからぬ不快感を感じ

ていたが、幕営からの命令では、従うほかは無かった。

「殺すといつてもどうするんです？ 行動してもまた捕まるのが落ちでは？ 私も一度帰還して本国からの応援を呼ぶほうを支持しますがね」と、高家出身という村主さんが気楽な調子で言う。

「本国からは増援も軍も出さない方針だ。あくまで我々だけで対処しなければならぬ。

だから、村民を使う。周囲の村々の人手を徴発し、歪子を討伐する。そのために村民に対しての権限を与えられてきたんだ。

武器と資材は既に別働隊が運んできている手筈だ。

本国では先の戦で歪軍が壊滅し、自国を守る兵力しかない。それでも足りないほどだ。とても南海州の反逆者の鎮圧に兵は向けられない。

我々で、何とかするんだ。そのために現地民を使って対処する」

「大層大儀な話で……」と、村主さんが呟いた後は、誰も何も言わなかった。

それから、班員と合流して、寒遼村への道を辿っていったのだった。

7話

寒遼村へ戻って数日、民家を借用してその中に籠り、今後の話し合いに時間を費やした。

まず相手の情報力が優れており、なぜこちらの手の内が筒抜けだったのかが不明で、周囲の村への徴発を行ったとしてもその情報は漏れる恐れがあった。

漏れた場合周囲の村から徴兵した兵を一箇所に集結させ、兵装を与えるのでは、集まる段階でバラバラに確固撃破される恐れがあった。だから徴発を行う前に各村に事前に物資を届け、徴発した段階で戦えるように兵装を各村に届けなければならない。

そのために村々の規模に応じて、優先的に物資を振り分ける具合を考え、実際に物資を輸送している輜重隊に伝令を送った。

輜重隊への連絡もまた神経を使った。

伝令が敵方に見つかり、輜重隊の位置を察知されればこちらの交戦意図や計画が丸わかりとなり危険を招く。

それと共に輜重隊の、各村への物資の到達と村への徴兵は兵の獲得と武装を同時に行って兵をすぐに戦える状態にするためにも、人員を大勢割くほうが望ましい事だった。

だから、三班の人員の大部分を輜重隊との合流に振り向け、事前に徴兵後の合流ルートを決め、作戦の実行と相成った。

私と三番小班的班長の村主さん他二名は寒遼村で待機し、何か有事の場合本国に帰還し報告する役目を担った。

何日めかの朝、目が覚めて村外れの井戸に顔を洗いに行くと、同僚の村主さんが井戸の前で煙管を一服していた。

「どうも、おはようございます」と挨拶をすると向こうもおはようございます、と頭を下げた。

こちらが冷たい水を顔にかけると、向こうが不意に声をかけてきた。

「貴方の事は以前から知っていましたが、歪子というのは知らなかった」

と話しかけられ、私は顔を洗う手を止めて彼のほうに向いた。相変わらず、気の抜いたような顔をしている。

「部下の手前、そういう話はしませんでしたがね。小沼さんは知っていた様子でしたが、どうも今回は妙ですね。」

歪子がダチュラの変毒から生き残った人間だとは知っていますが、幾ら本国が手薄になるとは言え反乱に対してまったく人員を送ってこないというのは明らかにおかしい。

一斑や二班の増援だって良いわけです。でも送ってこない。

その事情には歪子の特殊性があるような気がしてならないのですよ。歪子とは、なんなんですか？　なぜ本国が二の足を踏む？」

「私も何も知らない。聞かれても何のことだか、本当に答えられないんです」

事実だった。

私の認識も、村主さんと似たようなものだ。

毒から生き残っただけの人間としか認識がない。

だから彼の質問には答えられないのだが、村主さんは怪訝そうに納得していない様子だった。

「お侍様の疑問に、私が答えてあげる」

後ろから声がした。

見ればカナが、いつの間に帰ってきてたのか桶を持って私の後ろに立っていた。

「ほう、何か知ってるんですか？」と村主さんは苦笑いするような感じでカナに話しかけていた。

「ええ、私、物知りだから。

歪子の生成は、エフタリの王国の時代に考えられた制度なの。

ダチュラの変毒に耐えられるのは選ばれたエフタリだけという伝承が、古くから王国に伝わっていた。

実際は、ダチュラの心毒に対して耐性を持つように変異させたのがエフタリという民族なの。

その意義は、ダチュラという怪物の血を人の肉に受肉させるため。そうすることでダチュラの性質と属性を人に付与させる事が出来たと、信じられていた。実際もそうだった。

怪物としての属性を付与された人物は、怪物であるために人は殺せない。

でも怪物であると同時に人間でもあるから、肉体的には殺せるといふ矛盾を持つ。

にもかかわらず、歪子は脆弱な肉体を、周囲の環境的要素を活用する事で、その敵を悉く滅ぼした。

だから、歪子を一言で表わすなら、殺すことの出来る怪物」

よく分からないようなことをカナはこちらに語っていた。

今の話で理解できたのは歪子の発生の起源がエフタリ王国の時代であることと、それが儀式的になされていたこと。

ダチュラの力が毒を受けた人間に付与される事、ぐらいだった。

村主さんがちよつと面食らったような顔をしながら「それは、どこから知ったの？」と聞いた。

「私はエフタリ人だから、知ってるだけだよ」そう静かに言っ
て私の隣に並んで桶を井戸の中に沈めていく。

刀を持った人間に恐怖心すら見せず、ただ何事もなく。

それを私と村主さんは、何か不思議なものでも見るように眺めていた。

八

それから四日後の事、寒遼村に配される分の輜重隊が到着した。

当初の見込みでは位置的な関係から七日ほどかかると見込まれていたため、かなり無理をしたらしい。

輜重隊と合流した班員が事の重大さを吹き込んだのかもしれない。

ともかくも、私は輜重品である兵装を輜重隊の人員と共に村に積み下ろし、村主さんと他二名は寒遼村の兵の募集を始める事となった。

夕刻、一通りの積荷を馬車から積み下ろし、村の倉庫付近に運んだ辺りで、村主さんがこちらの様子を見に来たのかやってきた。

「やあ、お疲れ様です。

こちらは67人の志願兵を集めて、後は十世帯ほど回れば終わるよ。

…… そちらもだいぶ片付いたようだね。

租税の負担を十年間軽くする、という条件だけど、村の規模を考えれば悪くない集まりだね」そう言って煙管を懷から取り出し、火打石で火をつけてあぶる。

私を歪子と知っても変わらずに話しかけてくれるのは、育ちのよさから来る余裕か、元来の軽い性格のお陰だろうと思った。

しかし正確には私は歪子ではなく、歪子になりかけて治った立場なのだけど、説明がややこしいのでやめておいた。

それを気にする人物でもあるまい。そう思い、そのことは言わなかった。

「当初寒遼村からは五十人という想定でしたね。確かに、悪くない

誤算だ。

敵方が、少なくとも塔を守備していたエフタリ兵が100あまりでありましたから、それ以外の兵の存在を考慮したら多いに越したことはないですから。

後は他の村の集まり次第ですね」

すると村主さんは煙管を吸いながら呟いた。

「君は、真面目だねえ。

塔を守る守備隊以外の兵の存在については、心配はないよ。

こっちもただ間抜けに捕まっていたわけじゃない。

エフタリ人の間でも、意見は分かれている。

大多数のエフタリ系部族は、歪子に本当に王たる資質があるか見極めるために静観の立場を取っている。

一部の熱烈な民族主義者が集って、それをある族長が纏めて歪子を守ってはいるけど、大多数のエフタリは冷静なんだ。

これはやり方を間違えれば大問題に発展するけど、やり方さえ間違えなければ単なる反乱の鎮圧だ。

とにかく我々は塔の守備を突破し、歪子を殺せば良い。それだけ。難しい事じゃあ、ないはずだ」と、村主さんは煙管から吸った煙を吐き出した。

ただ、と村主さんは付け加える。

「歪子を殺して、その後どうなるかね。一件落着か、まだ一悶着あるか、いずれにせよしばらくは即席の軍を率いてこの辺一体にたむろしなきゃなんないだろうね。

海人の国や、大多数のエフタリが動く前に、さっさと終わらせよう」
そう言うと、彼はこちらを見た。

「それとも、同じ境遇の歪子に、何か憐憫でもあるかい？」村主さんは敬語を使わずに親しげに語りかける。というより、敬語を使うのが面倒くさくなったというような口ぶりだ。

私は表情を変えずに答えた。

「いや、憐憫はあっても、それがどうという事はないよ。俺は、自分の生活や家族のほうが大事だ」

そう答えると、村主さんは聞いたことに対して後悔したのか、ばつが悪そうに顔を背けた。

兵の徴兵と、兵装の装備を行き渡らせると、我々は近場の農兵団と合流する事になった。

我々が用意できた兵の数はちょうど七十。

兵装七十人分が寒遼村に配されたから、兵士も七十人集まった時点で募集を打ち切った。

我々は次の近江村途中の街道で、各村から結集した農兵団と合流する手筈である。

農民達は刀の扱いも知らないわけだが、体つきは農で鍛えただけあって良い。体力もある。

小手先の技術はあるに越した事は無いが、とにかく刀を振って敵を殺せれば良いわけで、それぐらいなら教えなくてもわかるだろうと思っていた。

徴兵に当たっては、軍の参加による租税の軽減のほかに、活躍すれば豪への居住権や正規軍への取立て等いろいろ取り決めておいた。が、実戦が始まって及び腰にならないか、その点が一番の心配する点だった。

特に、エフタリは自治独立して生活している民族だから、戦におけ

る心構えは老若男女できていると聞く。

戦った場合、数で優勢とは言え、勝てるかどうかわからなかった。

街道を行軍しての進行であつたが、近隣の近江からも農兵団がこちら側に向かつているはずである。

いずれぶつかり合う形で合流できるはず。

私と村主さんはただ警戒しながら、軍の統率を村主さんの部下と輜重隊の人員に任せて先頭を進み、前方に農兵団の一団が見えてくるのを待った。

その時、前方から走ってくる男が見えた。

遠く、小さな残像が、徐々に克明になっていき、その姿を確認した時それは守衛隊の袴を着た、私の部下であると確認できた。

私はそれを見ると何かの報告だろうと察知して駆け寄っていった。

それは班員の葛西で、ぜえぜえと息を切らしているのを落ち着かせた。

「いま、小沼班長の率いる農兵団が、敵軍と交戦中です！

そのため、伝令に、参りました！」と、息を切らせてこちらに語る。

私は頷き「分かった、急いで小沼さん達と合流する。お前はこの兵団に加わって一緒に来い」

そう言うが、葛西は首を振った。

「いえ、そうではなく、このまま貴方は塔に攻め入ってください。小沼班長によれば、交戦中の敵軍は塔を守備していたと思われる敵の主力。

ですから、塔の守備は極端に薄いはず。

こちらの敵は何かするから、そちらは塔に攻め込み、なんとかしても歪子を殺せ、とのことですよ」

「しかし、他に敵軍がまだいたら……」と私が言うと、後ろから来ていた村主さんが私に言った。

「いや、どちらにせよ他に敵軍がいればどうにもならない。

だから塔に我々が斥候としていつて、敵軍がいなか確認すべきだろう。」

敵軍がいなければそのまま王を取れる。敵軍がいれば、我々の内の生き残った者が小沼さんに撤退を知らせればいい。

試す価値はある」

「敵がそこまで馬鹿だとは思えないが……わかった、貴方が以前言っていた他に軍の存在は心配ないと言っていたことを信じよう」そう言つと、村主さんは少し笑った。

「ああ、信じてくれていい」それで、方針が決まった。

九

異様に霧の深い、日中の森林。

農民とはいえ彼らは私らに忠実で、いつ野獣が襲うともしれない森林の只中を、こちらに付き従ってついてきてくれていた。

それとも、野獣、あるいは魔獣と遭遇するかもしれない森の中で、孤立するのが、ただ怖かったのかもしれない。

全員既に抜刀している。

そう命じてあるから。

いつ何時奇襲がきてもおかしくない状況下。刀を鞘にしまっておく理由など無かった。

私ら侍や輜重隊の人員を含めた82名の農兵団を前衛、後衛に分け、前衛を私が担当し、後衛を村主さんが担当していた。

戦闘の経験があるのは守衛隊の面々と、輜重隊の幾人か。

彼らを心理的指揮官として、残りの農民達を統率していた。

前衛の行く先を先に進む、二名の侍が、行く先の安否を確認し、慎重に進む布陣。

前衛と後衛を、菱形に囲むように、見張りを立てていた。

誰も何も囁く事はない。

事前に無駄口を徹底していた。軍規というよりより実践的な理由から。

声を立てれば、例えば魔獣の一種ならば数里先からでも気づかれるから。

そんな静寂の中で、神経を研ぎ澄ませ、緊張と危機感を感じながら進むのは、軍人でない彼らには負担であろう。

訓練とは、戦の技術を学ぶ以前に心理的な慣れのほうが重要だった。

時折前衛の斥候が止まる様に合図を出すと、一気に周囲は緊張して息を飲み、一つの集団が一つの生き物のように密集しあう。

呼吸までもが、一つになるような錯覚を覚える。

それもまた何事も無かったと分かると、また、そろそろと歩きを開始するのだった。

「臨戦！ 構えよ！！」突如そんな静寂の中に鳴り響く、甲高い男の声。

後衛の方からの、村主さんの声だった。

私も続いて、「構え~~~~~、転進し、後衛に合流！」と控えめに叫んだ。

速歩で後ろに転進すると、後衛の村主さんと、イタチの様な、熊ほどもでかい体躯の魔獣数十匹ほどが対峙していた。

この状況を見れば、事の絶望的な危機が、嫌でも分かるものだった。この種別の魔獣は好戦的で、滅多に天敵のいない陸上の生物としては性質の悪いもの。

仮に武装した百名ばかりの軍隊でも、これほどの一団に出会えば皆殺しが山だった。

その野獣たちの中に、歪子、ミズキと、以前会った時歪子の隣に立っていた若い男が立ちすくんでいた。

光景にどのような意味合いがあるか、瞬間的には理解しかねたが、動画的には理解できた。

魔獣たちは歪子を襲わない。都合よく遭遇した、魔獣の一団。何らかの手法的なもので、魔獣を操っているのではと勘繰った。

そうすると、この緊張状態の対峙の状態の中で、歪子に向かって叫んでいた。

「ミズキ！ 降伏しろ！

本国の軍隊が動く前に、どこかに逃亡するんだ！

こんなことをして何になる！

お前は、何がしたいんだ！」その場に居た全員が私を見た。歪子も含めて。

本音でもあった。

心毒を耐えて、その先に、こんなことをして何がしたいんだと。俺だってこんな仕事はしたくない。

やらなきゃいけないし実際やるしそんなことは分かってるけど、やりたくないのも本心だった。

そんな私の様子を、歪子は嘲笑うように見ていた。

「やっぱり、出来損ないの貴方には分からないんだね。

感傷的なものなんて、私に抱かなくて良いのよ？ 私は必要なものは自分で手に入れる。

遊びじゃない、趣味じゃない。生き残るための手段なんだよ。

邪魔するなら皆殺しだ。全員殺せ」

ギギギギイ、と、空気が絞られるように圧縮されていく。

それは魔獣たちが放つ殺意のうねりと、それを圧倒するほどの歪子の悪意だった。

まるで周囲から酸素が蒸発したように、誰もが息を止めていた。

何人かが刀を落とす。

戦う戦わない以前に、殺されないためにどうしたら良いか、考えて

るものが大多数。こちら側はそんな表情と空気だった。

そんな只中を、私は農兵団と魔獣の一団の間に立つように陣取った。まだ、交渉の余地があるならば。全力でそれを行わなければ死ぬのは私らだった。

「お前が有利なのは確かだ。交渉に乗る必要はないと考えてるんだろ。」

だがお前をこの場で殺すことは出来るぞ。お前だけの命を狙えば。俺には出来る」

恐らく、魔獣は歪子が統率してる。

やつがこの場にわざわざ出向いたのも、魔獣を近くで統率する必要があつたからだろう。

統率されない魔獣ならば、被害は甚大でも何人かは生き残る。そうすれば本隊に撤退を知らせられるし、歪子を殺害できれば事態解決の大きな前進となる。

命を賭ければ、出きる筈だ。こちらの命と引き換えならば、歪子を道ずれに殺せるはず。そう自分では確信していた。

歪子はしらけたように、悪意に彩られた歪んだ顔の表情を緩めた。

「意外と冷静なやつだな。

面白い提案ではある。確かに、貴方ならば私の命に届きつるというのは事実ね。

かといってダチュラの手前お前を殺すわけにもいかない。だから、お前にだけは帰って欲しかったんだけどね」

そう冷笑した後で、続ける。

「この場を退くことはやぶさかでない。

けれど、それではこちらが譲歩し続けている形になる。こちらとしては、リスクさえ犯せば高確率で貴方方を皆殺しに出来るというカードも持っているのだから。

この場を退く、代わりに、お前というカードをよこせ。
つまり、私たちについて来い」

そう言つて、こちらに手を差し出す。

私は意味合いを把握しかねた。

「つまり拘束されると？」

なぜ殺さない、と、脳裏に怒りにも似た感覚が涌いた。が、それを理解しているように、相手も冷笑を返した。

「その条件は呑めない！」そう後ろから誰かが叫んだ。

振り返れば七番小班の班員だった。

こちら側に歩み寄つて、刀を歪子に向けた。

「四の五の言わずにかかつて来い、お前の条件など飲む筋合いはないんだ！ お前に意見する権利なんてないんだ！」

異様な怒気でまくし立てる。

その顔は蒼白に染まり、怒りで恐怖を隠しているようだった。

歪子は不快そうに顔を歪めた。

「ははは、幕営からそう言い含められたのか。

私に対する有効的なカードを取り込まれる前に、消せというわけだ

ね。

どうする？ 弥助」

班員は更に声を強めて怒鳴った。

「黙れ！ 貴様の思い通りにさせるか！」そう怒鳴った途端、突如班員は

私に振りかぶり、刀を振り下ろしていた。

発作的に回避行動として手甲で防御しようと、手を全面に押し出し、刀がそれに触れたかと一瞬の機微で判断した瞬間、班員の体は消し飛んだ。

いや、状況を動的に分析すると、魔獣がその班員の体を凄まじい豪腕でなぎ払ったのだった。

剛鉄の鎧を着込んでいない生身の体は、どうなったかも分からないほど吹き飛ばされて、目の前から消えた。

血痕の後すら無かった。

「予想づみだよ、冷静さを欠いたね」そう一人呟く、歪子の声だけが場に響いた。

歪子は続ける。

「お前の本国の意思が分かったろう？

つまり有用ならば生かす。不用、或いは脅威であれば消す。

そついう危うい立場にいるより、私のところにいたほうが安全じゃ

ないか？

少なくとも私は貴方を殺せない。証明積みのはずだけど？」

自身の手甲を見る。

刀の跡が残っていた。

「自分の命の、置かれた状況を見れば、どちらにつくか一目瞭然のはずだけど」と、歪子が笑いながら語った。

俺は……………「分かっているが、家族がいる。お前の側にはつけない」単純に、そう答えた。

何か、自分を繋ぎとめる理由がないか、考えた。そう考えた時、それしか出て来なかった。

この時、この瞬間、思いとどまれる理由があつたことに、私は感謝した。

「そう……。なら、そろそろ、、、殺し合いを——————」

再びに戻る修羅場。

悪意と殺意のうねり。

こちら側も刺し違える覚悟で、歪子を殺す決意が出来た事で、話し合う意味はあつたようだ。

そこから、数瞬の時も経ずに、戦いは始まった。

魔獣の動きは明らかに組織立っていた。

魔獣のうちの幾匹かが網を広げるように我々の農兵团を取り囲む。

その、躊躇のない行動と、悪意的な意図を目にして、農民達は逃げようとした矢先から出鼻を挫かれたのだった。

更に残った魔獣は、五匹が我々の前に立ち、その後ろに八匹、更に五匹が歪子を取り囲む、そのような布陣だった。

こちらは逃げる事も出来ない。その暇さえなかった。

じりじりと迫る前衛の五匹に対して、私と幾人かを除く農兵团全体が下がっていく。

私は横目で村主さんを見た。いま、やりたいこと、言いたいこと、それらを全て代弁するように、村主さんが叫んだ。

「ともかく後衛の魔獣共を蹴散らせ！ その後は逃げようが構わない！
い！

前衛は我々侍が何とかする！ かかれ！」

その途端村主さんが、数間先で雄たけびを挙げながら前衛の魔獣に向かつて突進していくのを見た。

そこから間髪入れずに他の班員が「俺について来い！ 後ろの魔獣を殺るぞっ！」と叫ぶ声が聞こえ、その後咆哮と共に農兵团全体が動いた。

横目で村主さんが魔獣に組み伏せられてるのを、侍達が駆け寄って魔獣に刀を突き立てているのを見た。

それを遠巻きの魔獣が更に侍達を取り囲む。

なのに、魔獣たちは私には一切襲ってこなかった。

酷く、心が高鳴る。

私は自分でも良く分からない雄たけびを挙げながら、その前衛の魔獣と侍達の争いに加わろうと突進に似たような走り方で魔獣の一体に斬りつけた。

脳天から唐竹割りに振りがぶると、かなり強い感触がして、けれども確実に魔獣の頭蓋を力チ割った。

そう手ごたえを感じる束の間、別の一体が私の胴体に猛烈な体当たりを行ってきた。

距離感も分からないようなほど、中空に飛ばされる。

自然に私は頭を庇いながら、背中から何回転もしながら地面に転がった。

そうして私は再び、魔獣と侍達の争いの輪の中から外れたのだった。まるで意図的に参加させないように。

刀を握ったまま地面から上半身を両手で起し、起き上がろうとした途端あばらに凄まじい鋭敏な激痛が走った。

「ふっ……………！」思わずそんな息が零れた。

恐らく、骨が完全にいつてしまったのだろう。痛みを持った部分が熱を持ったように熱かった。

「くそつたれえ……………！」

何がなんだか、分からなくなっていた。
戦い方じゃない。戦う動機だ。

簡単に私を殺そうとする祖国。同じ立場、苦しみを持った敵。どうして戦って、命を張るのか。いままで考えた事の無い疑問。

「家族がいるんだ」一人でそう呟く。

この戦いに勝ったとして、歪子の対抗手段たる私が歪子を殺した時点で本国から不要になって殺される可能性だつてある。

「家族がいるんだよ」疑念を掻き消そうと何度も何度もそう呟いた。

私なんて大した人間じゃない。

国に利用され、利用するなんて器じゃない。

ただ刀を振るうだけしか能のない一兵卒だ。

「難しい事はわかんねえけど」

守衛隊に入ったのも、戦いに命張るのも、いつも私を迎えてくれる家族がいるからだ。

自分の立場なんて痛いほど分かっている。

ダチュラに噛まれ、狂人扱いされ、一生世捨て人となるしかないはずだった自分を、隠して守ってくれている家族を、私は裏切れない。

「お前の事は、可哀相だよ。死ぬほど気持ち分かるよ」歪子。

いままで地獄だったはずだ。そしてこれからもなんの変哲も無くずっと地獄の毎日が続く。

誰も助けてはくれない。根本的にこれは毒による生涯続く症状。解決策なんてないんだ。

助けてあげたい。味方でいてやりたい。
でも。

それが不可能だと、最初から悟っていた。
だから、この仕事を引き受けたんだ。

あばらの燃えるような痛み。

地獄の業火に比べれば、大した熱度ではなかった。

抑えていた片手を離して、両手で地べたに手をつく、刀を強く握りなおして魔獣と侍達の集団の中へと疾走した。

凄まじい心臓の脈動がただの人では膨張して飛び散りそうなほどの血圧で体中に血を行き渡らせると、かつてあり得ないほどの迅速さと冷静さで一太刀、二太刀、三太刀の動作で前方の魔獣三匹の巨体を切断し内蔵を粉碎した。

周囲5間までも魔獣の血が飛び散り、周囲の魔獣はその光景を見てほぼ生理的な反応速度で私の周囲から飛び退いて間合いを外した。地べたに半ば倒れこみながら刀を振り回していた味方の侍たちは、魔獣の脅威が瞬間的に消えたと見るや否やすぐさま起き上がった私の周囲を取り囲むようにして刀を方々に向けた。

背中を合わせた侍が、こちらに話を向ける。「向こう側の二匹を任せる。小谷野、小野と私はその間に歪子と取り巻きの魔獣共を片付ける」

困難な提案だなと思った。

たった三名で魔獣五匹と歪子を殺せはしない。奴等の五倍の人員でも怪しいものだった。

どの道凄まじい劣勢なんだ。普通にやってたら全滅は必死。無理をしなければならぬ。

「前衛の魔獣共と歪子は俺が片付ける。村主さんらは後衛の手助けを」

いま前衛で戦っている侍たちを後衛に加わらせれば勝機はある。

「馬鹿言つな……！ 君一人で何になる！」村主さんが怒声を上げるが、私は冷静だった。

「出来る。足止めなら。この距離範囲なら」

前衛魔獣。歪子。森林。侍。後衛兵団。虚勢でなくこれらの位置関係から、一匹も逃さず疾走の範囲内で全て止められる確信があった。「行け。問答の時間は無い。話し合いは終わりだ」

村主さんが踏ん切ったように後衛側に向かって走り出すと、遅れていまの会話を聞いていた侍たちが若干躊躇して走り出した。

その次瞬、魔獣の一体が駆け出そうとした侍に凄まじい速度で突きの一閃を繰り出そうとした。

私は進行上の侍を片手で押し飛ばし、その侍へ突進してきていた魔獣の迅速な一突きに対抗する形で右胴払いをかけた。

奇妙な形となった。

魔獣は勢いそのままに疾走し、走り去ろうとしたが上半身と下半身の合間に結合を維持できないほどの深い切り傷を負っていたので走り抜けて振り向こうとしたそのままに上半身が下半身から落ちた。

ぽかんと私を見上げる侍に「早く行け」と叱咤してから、体を魔獣たちに向けた。

戦う理由。

それはいまの状況を壊したくないという消極的な理由に過ぎない。

しかし、自分の命を張るには充分すぎた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9264m/>

鬼の系譜

2011年10月7日10時40分発行